

■ 第15回 多摩川流域セミナー

源流再生・森と川と海をつなぐネットワークを

主催：多摩川流域懇談会

現在全国各地の源流域は、過疎化と高齢化の荒波にさらされ、林業など基幹産業の衰退と相まって、基礎的自治体の存立さえ危ぶまれるなど、様々な課題を抱えています。

源流域の抱える課題を解決するには、源流に暮らす人々と、源流の恩恵を受けている人々が、協力・協働しパートナーシップを確立して、上下流連携を図りながら、流域単位で流域の資源を守る取り組みを強めることが求められています。

環境省・国土交通省・林野省などの省庁連携による「源流再生・流域単位の国土の管理と保全（国土施策創発調査）」に関する全国源流一斉調査がこの秋に開始されるなど、源流へ新しい光が注がれています。

全国各地の源流の仲間の参加も得て、源流フォーラムとの同時開催とすると共に、源流観察会を通して源流への理解を一層深め、講師と参加者が自由に意見交換し、源流の明日と希望を語り合います。



- テーマ・・・「源流再生・上下流連携と流域パートナーシップ」

＝ 山（森）と川と海をつなぐ命のネットワーク ＝

- 日時・・・2004年12月11日（土）午前10時30分 開会

2004年12月12日（日）午後3時 解散

- 内容・・・1日目（2004年12月11日 土曜日）

- ・挨拶 : 廣瀬 文夫（山梨県小菅村長）
- ・講演 : 高橋 裕（東京大学名誉教授）
- ・講師 : 長島 保（多摩川流域ネットワーク代表）
河村 文夫（奥多摩町長・多摩川源流協議会長）
岩井 國臣（国土交通副大臣）
海野 修司（国土交通省 京浜河川事務所長）
中村 文明（多摩川源流研究所長）
- ・コーディネーター : 山道 省三（全国水環境交流会代表）
- ・交流会 : 源流から河口まで各地で活動する市民による情報・経験交流会

- ・・・2日目（2004年12月12日 日曜日）

- ・源流観察会 : 多摩川の源流の各地を巡る源流観察会

- その他・・・定員：60名（先着順） ・参加費：無料 ・宿泊費：8,000円（1泊3食-11日夜/12日朝・昼） ・多摩川流域懇談会,小菅村,全国源流ネットワーク

■ 第15回 多摩川流域セミナー 開催報告

源流再生・森と川と海をつなぐネットワークを

主催：多摩川流域懇談会

2004(平成16)年12月11日(土)12日(日)の2日間にわたり、多摩川流域懇談会が主催する第15回多摩川流域セミナーを、多摩川の源流域である山梨県北都留郡小菅村で行いました。島根・宮崎・岡山県などからも多数のご参加をいただき、総勢80名以上のおみなさんと、“源流再生・森と川と海をつなぐネットワーク”をテーマにセミナーを行いました。



1日目 12月11日(土)

10:30 開会の挨拶



小菅村長 廣瀬氏

10:45 講演

「源流の役割と上下流連携」



東京大学名誉教 高橋氏

11:30 講師の意見発表

「源流の現状と今後の課題」



源流研究所 中村氏

11:45 講師の意見発表

「都市と農山村の共生
を考える」



国土交通副大臣 岩井

13:00 講師の意見発表

「鹿の食害対策など奥多摩長
の課題」



奥多摩町長 河村氏

13:15 講師の意見発表

「TRMによるいい川づくりの現
状と課題」



京浜河川事務所長 海野

13:30 講師の意見発表

「山(森)がこけたら下
流は大水に」



TBネット代表 長島氏

13:55 ディスカッション

「源流再生・上下流連携と流域パートナーシップ」



コーディネーター 全国水環境交流会代表 山道氏



15:00 意見交換会 「源流再生に向けた情報交換」



コーディネーター

TBネット副代表 倉持氏&京浜河川事務所河川環境調整官 山口

2日目 12月12日(日)

9:00 小菅村『林業廃棄物処理施設』



11:00 丹波山村小袖地区『鹿の食害の現場』



12:00 奥多摩町『小河内ダム』



13:00 奥多摩町水根地区『鹿の食害の現場』



現場見学

■ 1日目 - 12月11日

9:30 JR奥多摩駅集合

奥多摩駅の改札を出ると、真っ青な空と山が目飛び込んできました。
駅前のバスターミナルは、登山やトレッキングの人たちでいっぱいです。



奥多摩駅前



奥多摩駅

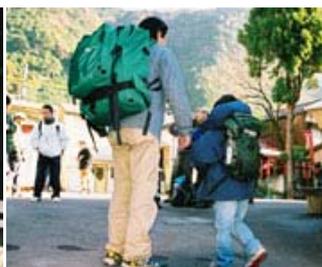


奥多摩駅前商店街

約20分毎に到着する電車で、参加者の皆さんが続々と集まり、受付でもらった名札を付けてバスに乗り込みます。



参加者のみなさん



参加者のみなさん



バスに乗り込むようす

10:30 セミナー開始

小菅村役場に到着しました。

この辺りには、その昔武田家の家臣で一帯を支配していた小菅遠江守信景(こすげ とうとうみのかみ のぶかげ)のお城があったそうです。



小菅村役場



セミナー会場の会議室



セミナー前のようす

小菅村の源流振興課長である青柳 諭さんの司会によって、いよいよセミナーが始まります。まず、小菅村長の廣瀬 文夫さんと、環境省 自然環境局の佐藤 寿延さんから開会の挨拶をいただきました。



青柳 諭さん



廣瀬 文夫さん



佐藤 寿延さん

10:45 講演『源流の役割と上下流連携』

高橋 裕先生

土木工学のご専門で、国際連合大学上席学術顧問であり東京大学名誉教授でもある高橋 裕先生から、『源流の役割と上下流連携』をテーマにご講演をいただきました。

“自然観”と共に“歴史観”を持つことの大切さを、日本が歩んできた歴史と共にお話いただきました。

「上下流が連携していくには、源流の価値を流域全体に知らせるようなシステムをつくる事が大切。」、また「失ってしまった日本人の優れた“自然観”を取り戻しましょう。そしてそれは、“歴史観”に基づいたものであるべきです。」というメッセージをいただきました。



11:30 講師の意見発表『源流の現状と今後の課題』

続いて、講師の意見発表です。

一番バッターの、源流研究所の所長であり全国源流ネットワークの代表でもある中村 文明さんより、『源流の現状と今後の課題』をテーマに、源流域の豊かな自然や、イベントの様子などを写真でご紹介いただきました。

また、塩山・丹波山版、小菅版に続き、中村さんが実際に歩いて作った奥多摩版の“源流絵図”の紹介と、卒業したら小菅村に住みたいという3人の東京農業大学生さんたちの紹介がありました。



中村 文明(なかむら ぶんめい)さん“源流絵図”の紹介



東京農業大学生

11:00 講師の意見発表『都市と農山村の共生を考える』

岩井 國臣副大臣

次の意見発表は、国土交通副大臣の岩井 國臣より『都市と農山村の共生を考える』をテーマにした話題です。

国土交通副大臣からは、「一番大切な事は、地元の人たちのホスピタリティではないか。がんばって色々な事をしなくても良いから、訪れた人にちょっとした事、道ばたに咲く花の話やお祭りの話でいい、そんなコミュニケーションをする事が大切なのではないか。そしてその情報を下流域へ発信して行く事が大切。」

また「多摩川は、流域として管理できる可能性が高い川なので、日本の、そして世界の最先端を目指した流域管理をしていきましょう！」というメッセージでした。



13:00 講師の意見発表『鹿の食害対策など奥多摩長の課題』

河村 文夫さん

昼食後は、奥多摩町長の河村 文夫さんより『鹿の食害対策など奥多摩長の課題』をテーマにした話題でお話をいただきました。

町の面積の約94%が山林である奥多摩町ですが、今“鹿の食害”や“過疎化”などたくさんの問題が起きています。

約二千頭いると言われる鹿が、植林した木や下草を食べてしまう事で、山が裸地化してしまい、砂場に手をつくると手形が残るのと同じ様な状態が山でも起きているそうです。当然その土は、激しい雨が降ると土砂となって流れ落ち、川へ流れ込むため川は濁ります。

食害の他にも間伐材の村内利用など様々な問題に前向きに取り組んでいらっしゃる町長は、「健康で自立できるまちを目指したい。」とおっしゃっていました。



13:15 講師の意見発表『TRMによるいい川づくりの現状と課題』

海野 修司

次は、京浜河川事務所長である海野 修司から『TRMによるいい川づくりの現状と課題』のテーマにお話をいたしました。

「TRM-多摩川リバーミュージアム」とは、市民の皆さんと行政と一緒に、多摩川での学習や活動のお手伝いや、水辺の楽校などの活動拠点の整備、またそれらについて情報発信や情報交換などを行っている取り組みです。

現在、源流研究所やせせらぎ館、水辺の楽校などを拠点として継続的な活動をしています。多摩川の上流と下流がふれあい、源流域のすばらしさが実感できるような活動もめざしています。



13:30 講師の意見発表『山(森)がこけたら下流は大水に』

長島 保さん

最後の意見発表は、地域史研究家で、NPO法人多摩川エコミュージアム代表理事、多摩川流域ネットワークの代表などを務められている長島 保さんに『山(森)がこけたら下流は大水に』というテーマでお話をいただきました。

「多摩川は私にとってふるさと。多摩川の水で産湯をつかい、泳ぎを覚え、両岸を行き来して、この川筋でずーっと暮らしてきた。」とおっしゃる長島さんからは、多摩川の下流域の治水の歴史を中心にお話いただきました。

「歴史的に見ないと川はつかめない。下流に住む人は上流の問題をきちんととらえ、川全体のあり方を考えなければいけない。その為にも、多摩川の源流から河口にいたる流域の、心ある人々がしっかりと手を結ぼう。」というメッセージをいただきました。



13:55 ディスカッション

休憩をはさみ、意見発表をいただいた講師の方々が『源流再生・上下流連携とパートナーシップ』をテーマにディスカッションを行い、様々な意見が交わされました。

ほんの一部をご紹介します。

ディスカッションのようす



岩井福大臣・・・流域の学校では教えられないことを学べる“源流大学”をつくりたい。

中村さん・・・源流のすばらしさ、源流の良さそのものを味わってもらう“源流ライフ”を子供たちに経験してもらいたい。

海野・・・今までの枠組みを打ち破り、すそ野を広げていきたい。

長島さん・・・今の川は人間がつくったもの。歴史の見えるまちづくり、歴史の見える川づくりをしてほしい。

河村さん・・・本来、人間が自然に身につけてきた技術が今の子供たちには欠けている。多摩川の魅力を再発見し、魅力的な人間を育てていきたい。

15:00 意見交換会

いよいよ最後のプログラム。『源流再生に向けた情報交換』をテーマに意見交換会を行いました。





ご意見のほんの一部をご紹介します。

- ・村の人は気づかないが、外から訪れる人にとっての魅力を探そう。
- ・流域の川の工事で、間伐材を利用してはどうか。
- ・源流域に来た人を素通りさせない工夫が必要。

■ 2日目 - 12月12日

8:20 出発

山に囲まれた小菅村にはまだ朝日が行き渡っていません。キーンと冷えた朝の空気の中、現場見学に出発します。



宿泊した旅館の周辺



出発のようす



お世話になった旅館のおばあちゃん

現場見学の前に、今回滞在している小菅村の典型的な里山風景を見に行きました。

日の当たる急な山の斜面を切り開いた畑でこんにゃく芋や麦をつくり、そのふもとには神社があります。神社の裏手には大きな柿の木があり、神社にも干し柿がつるしてありました。



急勾配の斜面につくられた畑



畑を見上げるようす



ふもとの神社



柿の木



干し柿



畑の持ち主のおじいさん

9:00 小菅村・林業廃棄物処理施設

この『林業廃棄物処理施設』が出来た事によって、今まで廃棄物として処理していた“間伐材”と、村外に
依頼処理していた“生ごみ”などの有機系廃棄物を有効利用できるようになりました。
間伐材をオガ粉にしたものに生ごみなどを混ぜて出来る堆肥や、オガ粉を作る過程で出来るヒノキ油・エキ
ス水などを村内で利用したり、販売しています。



林業廃棄物処理施設



見学の様子



オガ粉

11:00 丹波山村小袖地区

丹波山村の小袖地区へ移り、鹿の食害による被害を見学しました。
遠くから見ても、鹿によって食い尽くされた山が裸地化してしまっているのが一目でわかります。急な山間
に建つ家の間を抜けて、現場のすぐ近くまで行きました。家の周りに張りめぐらされたフェンスは、鹿を入れ
ないためのものだそうです。



鹿の食害見学



現場近くへ向かうようす



家や家への入口を囲むフェンス



食害によって裸地化した山



食害



鹿の食害見学

12:00 小河内ダム(奥多摩湖)

多摩川八景のひとつでもある『小河内ダム(奥多摩湖)』の湖畔で、旅館で作っていただいたお弁当を食べ
ました。

今年は台風も数多く上陸し、雨がたくさん降ったために、このダムにも貯水率90%以上とたくさんの水が蓄
えられていました。



13:00 奥多摩町・水根

小河内ダムからバスがやっと通れる程の急な坂道を昇り、奥多摩町水根の食害を見学しました。こちらでも鹿に食い尽くされ裸地化したようすを間近に見る事ができます。植樹した苗もすぐに食べてしまうので、幹をビニールで覆って食べられるのを防いでいます。また、ずっと続くフェンスは間伐材を利用したものだそうです。



急な坂道(バス内から撮影) 食害によって裸地化した山 食害によって裸地化した山



鹿の食害見学 植林苗 間伐材を利用したフェンス

15:00 解散

今回のセミナーで、たびたび耳にしたキーワードは“歴史”と“人”だったようです。多摩川の歴史を見つめ、多摩川流域の下流から源流までの人々が手をつなぎ合い、多摩川を守っていく事の大切さを実感しました。多摩川の流域全体としての管理のお手伝い出来るよう、私たち京浜河川事務所も努力してまいります。



多摩川河口 多摩川台公園 多摩川源流域

■ 第15回 多摩川流域セミナー 資料

資料-1 講師プロフィール

基調提案「源流の役割と上下流連携」

- 高橋 裕(たかはし ゆたか)

土木工学・国際連合大学上席学術顧問・東京大学名誉教授
『都市と水』『地球の水が危ない』(岩波新書)
『河川を愛するということ』『河川にもっと自由を』(山海堂)

ディスカッション「源流再生・上下流連携と流域パートナーシップ」

- 岩井 国臣(いわい くにのみ)

国土交通副大臣 自由民主党比例代表:当選2回

昭和13年2月5日京都市生まれ

趣味は囲碁(四段)・登山・ゴルフ・水泳

ニックネーム:岩(がん)ちゃん

- 履歴 ... 昭和35年 京都大学工学部土木工学科卒

昭和37年 京都大学院修士課程修了

昭和52年 関東地方建設局 京浜工事事務所長

昭和61年 九州地方建設局 河川部長

平成元年 中国地方建設局長

平成4年 河川局長

平成5年 河川環境管理財団理事長

平成7年 参議院議員初当選

平成13年 初代国土交通大臣政務官・参議院議員2期目当選

平成13年 参議院決算委員長

平成16年 国土交通副大臣

- 主な著書 ... 風土と地域づくりー風土を見つめる感性を育む(2003年4月発行 ブレーン出版)

... 21世紀 建設産業はどう変わるかー建設エンジニアのパラダイム転換(2001年2月発行 鹿島出版会)

... 桃源雲情ー地域づくりの哲学と実践(1994年12月発行 新公論社)

- サイト紹介 ... 岩井国臣ー岩井国臣が関係する全てのホームページの窓口。

<http://www.kuniomi.gr.jp/>

... 築土構木ー岩井国臣の政治活動について <http://www.kuniomi.gr.jp/chikudo/>

... 劇場国家にっぽんー度をテーマに歴史・哲学・政治を基盤にしたプライベートなホームページ <http://www.kuniomi.gr.jp/geki/>

*** 川のおじさんー川のテーマに何かを始め、話す、考える、読む。

<http://www.river-ing.com/>

- コメント *** 21世紀が平和の時代であり、コミュニケーションの時代であり、旅の時代であり、そして何よりも感性の時代であるという・・・そういう観点に立って、是非とも、21世紀における水源地域のすばらしい生き方をお考えいただきたい。水源地域万歳！！！！

● 河村 文夫(かわむら ふみお)

専門分野: 地方自治

役職: 奥多摩町長

目標: 町の自立と町民が生涯健康で快適に暮らせる生活環境の提供

● 海野 修司(うんの しゅうじ)

国土交通省関東地方整備局京浜河川事務所長

昭和34年7月8日 名古屋出身

建設省九州地方整備局遠賀川工事事務所長

建設省東北地方整備局高瀬川総合開発事務所長を経て京浜河川事務所長に就任

● 長島 保(ながしま たもつ)

地域史研究家・NPO法人多摩川エコミュージアム代表理事・多摩川流域ネットワーク代表

1934年東京生まれ。大好きな多摩川に余生をかけている。

● 中村 文明(なかむら ぶんめい)

多摩川源流研究所所長・全国源流ネットワーク代表

多摩川源流絵図塩山・丹波山版(1999年)・多摩川源流絵図小菅版(2002年)・多摩川源流絵図奥多摩版(2004年)をそれぞれ作成

資料-2 多摩川の源流の現状と課題について

(1) 写真による全国源流の紹介

多摩川源流 鹿の食害の現場

奈良・吉野川の源流 本沢川・三之公川・北股川

島根・高津川の源流(匹見町と六日市町)

宮崎・耳川の源流(椎葉村)

(2) 全国各地の源流域の厳しい現況

	昭和30年	昭和40年	昭和60年	平成16年
小菅村	2244名		1328名	1017名
丹波山村	2450名			862名

塩山・一之瀬高橋	650名			50名
川上村	7831名	7726名	3955名	2358名
早川町	8718名	6565名	2651名	1740名
五ヶ瀬町		8264名	5808名	4909名
新庄村		1708名	1272名	1136名
六日市町	11138名	8208名	6966名	6331名

(3) 高齢化率と土地利用(森林面積占有率)

	高齢化率	森林面積占有率
小菅村	33.80歳	95%
丹波山村	43.85歳	98%
塩山・一之瀬高橋	81.00歳	99%
川上村	43.70歳	95%
早川町	47.52歳	95%
五ヶ瀬町	30.00歳	88%
新庄村	367.10歳	91%
六日市町	35.18歳	93%

人口の減少は、国土の管理や保全の空白地域の拡大を意味する。

(4) 源流の課題の解決方法 源流資源の活用 上下流連携の促進

- 源流資源の活用 資源の調査とデータの蓄積 源流絵図の作成
情報の発信・資源の活用－源流体験・森林再生
- 定住人口から交流人口の拡充－上下流連携・流域ネットワークの構築
多摩川流域懇談会・多摩川流域協議会・・・行政の組織
多摩川流域ネットワーク・・・市民の組織

多摩川の特徴・・・138km 流域人口450万人

- 1.流域人口が非常に多く、源流と中・下流の関係が密接 水源林
- 2.多摩川の利用者はディズニーランド並である。関心が深い

高知県の四万十川の例	196km	8市町村	流域人口8万
島根県の江の川の例	196km	34市町村	流域人口18万
宮崎県の耳川の例	91km	5市町村	流域人口1万2千

- 県境の壁を越えること・既存の枠組みを超えること

情報の壁を乗り越えて

- 国民の意識の大展開の時代 環境の時代の到来
地球環境への国民の関心の高まり 大きな意識の変化
異常気象の頻発 将来への不安 環境の保全への参加の飛躍的増大
大定年時代(700万人)の到来
水資源・森林資源は国民生活に必要・不可欠である。
安定して持続的に生活できる源流の郷を残すことは大きな課題である。
社会的に必要なものは社会的な仕組みで支えることが基本である。

(5) 多摩川源流に魅せられて10年

多摩川は、塩山市・笠取山の南懐にある水干にその最初の一滴を記す。一滴一滴が寄り合い、無数の沢から谷に注ぎ、次第に水量を増し、V字に刻む夕刻を流れ下りる。水干沢・一之瀬川本谷・一之瀬川・丹波川・多摩川と名前を変えながら138kmを旅して東京湾に辿り着く。

多摩川源流に魅せられ、源流の溪谷や山々を歩き始めて10年になる。13の滝が連続する竜喰谷に最初に足を踏み入れた。人間の進入を拒み続ける大常木谷は、決して一人では入谷できない。大菩薩からの清流をたたえる泉水谷は何回足を向けても飽きがこない。妙見の滝や天狗棚沢の妖しい美しさに彩られた小菅川。奇岩と鍾乳洞を抱く日原川は実に懐が深い。牛金淵や坊主淵など歴史とロマンに満ちた丹波溪谷。悠久の世界と豊かな森の三条谷。そして、「通らず」という悪場さえ存在する一之瀬溪谷など、滝と菩薩の宿る多摩川源流の虜になってしまった。

(6) 多摩川源流絵図3部作が完成

1999年12月 多摩川源流絵図 甲州・丹波山版

12002年5月 多摩川源流絵図 小菅版

12004年10月 多摩川源流絵図 奥多摩版

(7) 東京農業大学の女学生の決断の紹介

資料-3 国土交通副大臣 岩井国臣

わが国は情報技術(IT)の最先端国家を目指そうとしている。今後いろいろな取り組みが行われて、IT革命が進展するであろうし、それによって人々のライフスタイルも大きく変革されていくものと思われる。

ライフスタイルの変革をもたらすのはIT革命だけではない。21世紀は平和の時代であり、コミュニケーションの時代であり、旅の時代である。そして何よりも感性の時代であると思う。その新しい時代の動きに対応し、ライフスタイルも変革せざるえないであろう。そこで、新しい国土政策が求められ、コンテンツ産業とビジター産業を意識した新たな地域振興策が必要となってくる。

コンテンツ産業とはインターネットで入手する情報を作る産業のこと。各地域の歴史と伝統・文化に基づいて作られるものすべてがその対象となり、地域の人々が幅広く従事できる。また、ビジター産業とは、いわゆる観光産業のほか、研修や会議、スポーツ大会、グリーンツーリズム、草の根国際交流などを対象とし、その整備からサービス提供までさまざまな職業があり得る。

それは各産業を育てるための地域振興策であると同時に、それによる利益を積極的に活用する政策でなくてはならない。そのためには各期間においていろいろな試みが求められるが、国土交通省としても、その所管事業のなかで何か新しい取り組みを行わなければならない。新時代の二大潮流を意識しているところにこの

事業の新鮮味があるし、育成と活用という両義性を有しているところに国家政策上の意義がある。
その観点から、IT革命とライフスタイルの変革に対応した地域振興策をモデル的に実施する必要があるのではなかろうか。皆さん方におかれては、21世紀が平和の時代であり、コミュニケーションの時代であり、旅の時代であり、そして何よりも感性の時代であるという・・・そういう観点に立って、是非とも21世紀における水源地域の素晴らしい生き方をお考えいただきたい。水源域万歳！！

資料-4 TRMによるいい川づくり

関東地方整備局 京浜河川事務所長 海野修司

● 多摩川流域リバーミュージアムの基本的考え方

- ・ 多摩川流域リバーミュージアムの基本理念は「多摩川の持つ価値を共有できる仕組みづくり」。
- ・ 多摩川の持つ価値を認識し、人と多摩川との良好な関係を創出することを目的として3つの柱「多摩川を学習や活動のフィールドに」「多摩川ともっともっとふれあいたい」「多摩川をもっと知りたい知らせたい」を市民と行政の協働取り組みにより展開。
- ・ 具体的な展開方策は
パートナーシップによる維持運営
地区情報拠点の設置
地域での活動をネットワーク化
多摩川の持つ情報の収集・加工・発信・蓄積

● 取り組み状況

- ・ 多摩川源流域上下流交流推進の視点で、河川としての源流域の持つ価値を実施することとして、環境調査・人材育成の仕組みづくりを検証(国道施策創発調査費)
源流域と交流する人材育成の仕組みづくりとして源流体験教室による学生ボランティアを目指し指導者育成を目指す。
- ・ 水辺の楽校による多摩川源流域上下流交流推進とあわせ、学校教育関係者まで広げた上下流交流の推進を図る
- ・ 環境学習懇談会
TRM推進のための学校教育へ浸透、教職員間ネットワーク組織の構築
環境学習教材の提供(環境学習プログラム集、環境学習マップ)
懇談会での意見収集と問題解決のための教育委員会・校長会へ環境学習の取り組みの説明

資料-5 山(森)がこけたら下流は大水に

多摩川流域ネットワーク代表 長島保

● 多摩川の下流から

多摩川は、私にとってふるさと。多摩川の水で産湯をつかい、泳ぎを覚え、兩岸を行き来して、この川筋でずーっと暮らしてきた。いままでに、多摩川の水害や築堤運動の歴史、川を利用した人々の生活史などを追いかけてきた。

● この一枚の写真＝干潮で姿を現した水制(画像1=左岸大田区西六郷岸辺の水制)

多摩川の下流左岸、東京都大田区六郷土手下で、本年3月の大潮の干潮どきに撮影した。江戸時代、各地の河川で増水して流れる水勢を押さえるために、両岸から川中へ張り出して造られた水制の一種だ。木枠を等間隔で方形に打ち込み、横木で四角く枠を君で、その中に石塊をたくさん詰め込んだものだ。慵枠か？片枠か？弁慶枠か？。以前から土地の古老からその存在を聞かされていたので、シャッターチャンスをねらっていた。とにかく、全部で4基も姿を現したのだ。

● この水制、いつごろ構築されたのか(画像2=多摩川治水記念碑)

対象7(1918)年度から昭和8(1933)年にかけて、多摩川下流改修事業が施工。内務省東京土木出張所(京浜河川事務所の前身だ)が、国の直轄事業として展開された。加工から、左岸は砧村宇奈根、右岸は高津村久地まで。両岸に連続堤築造、各地で浚渫などが進められた。この近代の治水工事に、なんと旧来の伝統的治水工法が併用されていたのだ。

● なぜ、この場所に構築されたのか

大きく蛇行する多摩川の流れが突き当たる場所。明治40(1907)年と43(1910)年には、堤防が決壊して、左岸下流一帯に大洪水を引き起こした。

● かつて多摩川はあばれ川だった(画像3=明治43年の決壊箇所)

江戸時代から出水、氾濫を繰り返す。数年に1回？いや2年に1回か。特に明治後半から大正初頭にかけて大水害が集中。明治27~28年=日清戦争、明治37~38年=日露戦争で、戦費が膨張し、内政費を圧迫。治水対策がなごりにされ、山が荒れ、水害が頻発した。明治43(1910)年には、近代史上最大の水害が、列島各地を襲った。これを機に、国は直轄河川を指定し、本格的治水事業に乗り出した。余談だが、日露戦争は借金(戦費の70%が外債や国債)で行った戦争だった。

● 六郷土手を多摩川治水の歴史が学べるポイントに(画像4=川の一里塚付近)

西六郷堤防強化対策工事の計画を京浜河川事務所から聞く。先の伝統工法の水制が4基とも川底に沈むという。水制の在りかを最初に教えてくれた平野順治先生、伝統工法を高く評価される高橋裕先生に相談。京浜河川事務所の担当者に、調査と史跡復元保存を強く要望。地元説明会でも復元保存の住民発言出る。

→ 工事(本年11月~翌1月)の中で水制復元を進めることに(京浜河川事務所)。すでに

(1) 既設水制工調査終了(結果報告書受領)。

(2) 水制箇所をドライにして、構造や寸法を確認し、写真撮影。同時に河川工学専門家の立ち会いも。

(3) 市民の見学会を開催予定。

(4) せせらぎ館に水制材料を展示。

(5) 元の位置に水制の材料を使って表示。

→ 近くの一里塚(スーパー堤防の一角)と一体化して多摩川流治水講演を創ろう

釜無川の信玄堤公園のように。森田通定の多摩川流工法(『治水要弁』)など紹介。

明治43年大水害や多摩川下流改修工事の歴史も学ぶ

● 山が荒れれば下流は大洪水に

上流の問題は、下流の大門だ。終戦直後、各地で発生した水害も、水源地の荒廃が誘因。ここ九十年、治水事業の結果安定している多摩川も、かつてはあばれ川だった。いま、流域住民の水防意識はきわめて薄い。水害の歴史や治水事業の成果は、なかなか見えにくいからだ。もっと上流に目を向けて、川全体の在り方を考えよう。そのために源流から河口にいたる流域の心ある人びとがしっかりと手を結ぼう。

画像1



左岸大田区西六郷岸辺の水制

画像2



多摩川治水記念碑

画像3



明治43年の決壊箇所

画像4



川の一里塚付近